

---

# 赤い蟲たちは戻らない

翡白 翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い蟲たちは戻らない

### 【Nコード】

N1307Z

### 【作者名】

翡白 翠

### 【あらすじ】

いつも通りにネットをやっていた雅俊の付近が突如光に包まれた。そして、雅俊は異世界に転移した。だが、周りを見ると同じように何が起きたかわからないような顔をしている人間が沢山。そして、声が聞こえてきた。そぼこえは、日本にいた人間約八千万人が転移し、こちらにきた人間は、“不老”で“不死”で“十六歳”で、しかもゲームをクリアすれば帰れると言い始め……！？ 主人公がと、ヒロインと、デスペナなしのVRMMO風味の異世界でどう生きるのか！？ 謎の方向性ファンタジー是非ともご覧あれ！

某生物の数え方は、一頭二頭ですよ！  
タンを押されることを推奨します。

虫嫌いの方は、戻るボ

## 一 頭目、転移

カタカタカタカタカタカタカタ……

薄暗い部屋。そこに延々と響いているのはパソコンのキーボードを押す音だった。

窓のカーテンは、完全に閉められており、ドアには鍵もかかっている。その完全に閉じられた部屋の中に、光源はあまりない。

パソコンの画面からと、携帯などの電子機器から漏れ出す微かな光。その部屋にあった光など、その程度のもだった。

その、薄暗く閉じきられた部屋の中で、男……霧島雅俊は、延々と、パソコンに向かい合っていた。年齢は二十四歳。同い年の常人なら、社会人になった疲れを持ちながら、今後の自分の栄光へ向け、全力で会社での業務という努力しているところだろう。仕事熱心な人なら、新たな資格を得るため、努力しているかもしれない。

だが、雅俊は、自宅のパソコンに向かい合っていた。

外をみると、せいぜい歩いているのは、手袋をしている人が少し現れている小学生や、黒い学ランを着て、部活が無いのか、意気揚々と帰宅している中学生くらいなもので、社会人の姿は全く見あたらない。

「疲れたな……」

誰もいない部屋の中で、雅俊は一人つぶやいた。パソコンの画面の右下に表示されていた時刻を、軽く見た。時間はまだ三時半を過ぎたところで、そんな時刻に家にいることがおかしい。だが、雅俊はそんなことをなにも考えずに、また電腦世界の中に、意識を落と

し、掲示板で徒然と、人を煽ったり、自演をしたりしていた。

要するに高等遊民……現代の貴族、自宅警備員、様々な言い方はあると思うが、有り体に言えば、ニート。働かず、教育も受けず、職業訓練も受けていない人間である。ただ、女性の場合は家事手伝いという便利な逃げ道がある。そして、雅俊は、自分たちは蔑称で言われるのに、便利な逃げ道を使った家事手伝いには明確な敵意を持っていた。

まあ、家からでないのだから、所詮電腦世界上の敵意でしかなく、明確な意味を持っていく訳ではないのだが。だが、敵意を持っていくのが持つて無かるうが、所詮ニートであり、引きこもりである。現実社会に発する影響など肉親を通した微妙な経済の動き程度のものでらう。

だが、

異変が起こった。

光る。光る。

雅俊は驚いた。何故なら、パソコンが尋常ではない光を発したからだ。

光を発していたのは、パソコンだけではなく、三ヶ月前にヒモにしていた彼女と別れたときから全く使っていない携帯電話も光ったし、深夜アニメを見ることにしか使われていない地上デジタルのテレビも光った。

薄暗い部屋は突如として光に包まれたのだ。

雅俊が知る由もないが、このとき、外も光った。

学ランを来た中学生が持つていた携帯電話も光ったし、雅俊の母が見ていた、ニート特集のテレビからも光った。雅俊と昔つきあっ

ていた彼女の音楽プレイヤーからも光った。

要するに、日本全国の全国的にネットワーク、まあ、ほぼすべての電子機器と言ってもいい。Wi-Fiにつないだことがあるすべての携帯ゲーム機からも光っていたし、電線につながっているものは大概が光った。光らなかった電子機器は、電池で動く程度のものでろう。

まあ、簡潔に結論から言うと、その光の周りにいた人間は、消えた。

雅俊もほかの例に漏れることはなく、現世から姿を消していた。

砂埃が舞い上がる。口の中に少し入ったかなと思しながら、雅俊は目を覚ました。

体が軽い。

瞬間的にそう思った。それもそのはずだ。三ヶ月前にヒモ生活を辞めてから段々と太っていった腹が縮んでいる。しかも、ニート生活で落ちた筋肉まで増えている。そして、ニートを初めてからなっていた猫背も直っていた。

周りを見渡す。

たくさんの人がいる。全員が高校にでも通っていそうな年だ。

自分の腕をみると、とても若々しく、数刻前の名残など、少ししか残っていないかった。

周りを見渡す。黒髪、茶髪。ここまでは普通だ。だが、こんなにも赤髪や、金髪、緑髪に青髪。様々な色の髪の色が見えた。自分の一本抜いてみると、先ほどまでであった黒髪の名残はなにも見あたらず、赤い髪の色が抜けた。

人間が変だ。

雅俊はそう思った。だが、人間以外も変だった。

人間がたっている場所は、コンクリートの欠片も見あたらず、なにも舗装されていない。道と呼んでいいのかわからない程度の曖昧な直線の両脇に建っている建造物は、現世の名残など何もなく、中世的なイメージをもてるものだった。

そして、なぜか開けた自分の周りの場所。とても大きかった。ざっと見渡しても千人以上の高校生程度の年齢の人間がいた。偶然にも雅俊が立っていたのは道路の近くだったので、道路をみることできたが、もう少し真ん中だと、人の群により道路をみることは叶わなかっただろう。

『あー、あー、ただいまマイクのテストちゅー』

唐突に声が響いた。いや、ざわめきは、声が響く前からあった、だが、不自然に拡張された声だった。

こんなにはつきりと母以外の声を聞いたのはいつぶりだろうかと思いつつも、動画サイトで、声くらいは聞いたなど、思い返した。

『みなさん。こんにちわー。このゲーム？ というか場所っすね。場所だね。うん。それを発見して、こんなゲームを企画しちゃった』

人達の一人、まあ、GM一号<sup>ゲームマスター</sup>とでも、呼んでくれよー」

ざわめきが大きくなった。怒声も聞こえる。

「ふざけんな！」「ここはどこだ！」「仕事があるんだ！」

確かな意志を持った声があちらこちらから聞こえ始める。

「あー、あー、どこも騒ぎ始めちゃって、静かにしないと説明を聞けないよあー？ 説明次第では戻れるかもしれないんだよあー？」

男の声はさらに響く。そして、ざわめきは少し小さくなった。

「まあ？ マイクつぱいの使えるのは俺だけってわけだから、ま  
ず聞こえると思うけどねー」

何が起こるんだ。そんな焦燥に駆られた。

「まあ、元の場所に戻せって奴はいるでしょ、でもざんねーん。ま  
だもどれませーん。ざんねんでしたー。まあ、永遠に戻れないわけ  
じゃないんだ。許してくれよあ？」

戻れないのか。パソコンと、三ヶ月前までたかっていた彼女に、  
母親の顔を少しだけ思い出した。

不思議とそれ以外の後悔はなかった。というか、後悔するものが  
なかった。何も残していない。せいぜい厨二病の黒歴史が残ってい  
るくらいか。

周りの人は、それを聞いて納めていた怒声を張り上げたが、永遠  
ではないと聞くと、また少し収まった。

「まあ、戻り方を知りたいよね？　優しい俺はおしえちゃうよおつとー！」

一瞬で静寂。それほど聞きたいのかと、雅俊は思った。不思議と雅俊に未練はあまりなかった。家で、パソコンの前で無為に一日を過ごすことに、いらだっていたのかも知れない。

「まあ、この世界、まあ、俺たちは セカンドアース second earth っていうだけだね、まあ、いいや、この second earth は略してSEかな？　システムエンジニアと同じ略だねっ、そんなことはどーでもいいや。まあ、このSE？　で、じゃねーや、の、どっかにいるラスボスを、こっちにきた日本にいる人、だいたい八千万人くらいかな？　小学生以下はこさせてないしね。やさしー。俺。まあ、小学生以下と、偶然にも、サングラスとかで光を浴びなかった人とか、山にこもってた人とか以外はだいたいこっちにきているんだ。で、その約八千万人を47×20の940ヶ所で割って、大体8000人くらいが一つの街にいるのかな？　まあ、そいつらの誰かが倒しやーいいんだ」

こっちが理解する間も与えず、男は延々と、語っていく。

「まあ、俺が話すことなんて大体メニューの中の説明書に載っている程度のもんなのさー。忘れりやー、見りやーいいよ。要するにさ、おまえ等はこっちのSEに閉じこめられたんだ。そして、元の世界に戻りたきゃー、こっちのラスボスを倒せってこと。はい、目的の解説しゅーりよー」

ゲーム。いや、汎用的なRPGみたいだなと、雅俊は思った。周りを見渡すと、納得したようなものと意味が分からず困惑している

人間の二種類に分かれていた。

『次ー、どこから解説するかね。まあ、どこでもいつか？ おまえ等ー、デバイスって唱えてみるさー。大丈夫さ、死にゃーしないよー』

「デバイス」 「デバイス」 「デバイス」 「デバイス」 ……………

デバイスという音が反芻した。雅俊もそれに加わる。

そうすると、なにやら汎用的なRPGの初期設定画面みたいなものを移したスマートフォンみたいなものがでてきた。

『名前決めろよー。こっちで一生使う名前だから、大切に決めてくれよー』

延々と指示されているのは癪だが、【名前を入力してください】と、でている画面に、いつも使っている『アル』という名前を入力した。

『こっちの世界での名前はそれねー？ 元の世界の名前も使っていないけど、大体の場所がこれを使うよー。君たちがお世話になるだろー冒険者ギルドとかもねー。元の世界の名前は使わなくても何とかなるよー』

デバイスの画面にアルは目を落とした。そこには、様々なステータスが表示されていた。

ジョブスキル、<sup>シーフ</sup>盗賊  
サブスキル、<sup>サモナー</sup>召喚師

、  
探索者

そこには、スキルがあった。それと赤髪の普通より少し上くらいの顔面偏差値の男。昔のアルにとても似ていた。瓜二つだ。

『そこに表示されてんのが、スキルねー。のばすことができるが増えるよー。ジョブスキルはサブスキルがたくさんあるよー。やったねー。と、まあ、ここらでお時間が来たようだー』

何の時間だろうか？ アル始めほとんどの人間が疑問に思った。

『まあ、デバイスをいじりゃー、説明書、取説だねっ、この世界の。が、出てくると思うわけだから、それでも見て、がんばってラスボスでも倒してねー』

いきなり説明を切る声の主に、広場に集まった人々は、憤慨したようだった。罵る声が聞こえた。アルはそれに参加せず、黙っていた。

『まあ、これが俺から君たちに伝える最後のルールだっ！ こっちの世界では、君たちは……  
不老不死で、思春期真っ盛りの十六歳だよっ！ じゃ、がんばってねえ〜』

ブチッ

何か回線のようなものが切れる音が聞こえた。

それつきり男の声が聞こえることはなく、広場には静寂が少しの間広がった。

## 二頭目、召喚

アルは携帯電話のようなデバイスを持ちながら、それを操作していた。

説明書、説明書。アルは少しだけ説明書を探すのに時間を割いた。思ったよりもそれは早く見つかった。

次は魔法、魔法と、説明書の中で探し始める。

簡潔に言おう。アルは魔法の使い方を探しているのである。

声の主が去った後、静寂は三十秒ほど続いた。その後、RPG世代の中年や、VRMMO物の小説を呼んでいるいまの中高大生程度の年齢だと思われる人間が、次々と広場から歩きだした。

はじめのモンスター狩り。それが序列を決定すると、その人々は感じ取った。残ったのはゲームのことなど知らぬ老害……失礼、差別用語だった。まあ、老人や、ゲームにふれたことがない女子中高大生、主婦、OLだったであろう人々は、動かなかった。動いた男女比は、八対二程度だっただろう。

アルは、その動いた人間の中でも、ほとんど一番目と変わらない時間で動き始めた。彼は人混みが苦手だ。二トの習性が人混みを苦手にする。それと、【魔法】への羨望が、彼を広場から早く動かした。

自分のステータスを見たときに目に入ってきた【召喚師】の三字。それは彼の心を躍らせた。

男の子なら誰でもあこがれるであろう、魔法という存在に、心を躍らせたのだ。

というわけで、彼はほぼ先頭組という早さで、広場を抜け、声の

主が示唆していた冒険者ギルドなどを無視して、路地裏に入った。ほかの人間に手札がばれるとまずい。

ニート生活で有り余った時間で、数多くのVRMMO物の小説、ラノベに手を出していた彼の結論はそれだった。だが、ネットゲには手を出していなかった。自由に使える金は、ほとんどがアニメやラノベに費やしていたからだ。だが、彼はネットゲの世界と、設定が全く同じ世界でも、状況は異なると感じた。老人だった世代もいるのだ。十六歳程度に、精神年齢が幼くなつてたとしても、今までの人生の経験や、感覚は残るだろう。それがただのネットゲと、この世界を変える要因になるだろうと、彼は感じた。

そして、彼は探した。召喚の方法を。

まだデバイスのボタンを押す音が響いている。スマートフォン変わらない形状であるデバイスの画面を触りながら、探す。

彼はスマートフォンを持ったことはなかったので、少し手間取りながらも、見つけた。

魔法の使い方だ。

彼はそのまま指示通りに、声を紡ぎ始める。

「《魔、界、在、黒、光、速、蝕、飛、出、現》」

召喚の魔法は、十文字の漢字の組み合わせで出来ていた。彼は召喚師の術である召喚術の一つ目、召喚、其の壱と、ステータスに表示されていたものを唱えた。

そして、彼の体から、何かが抜けていく感覚がした。彼が今デバイスを見ていたのなら、抜けていたのがMP、マジックポイントだということが瞬時にわかっただろう。

そして、抜けていたMPを使って、アルの目の前の地面が光り始めた。円形に、文字を象つたような物が、円の内側に延々と連なっ

ている。

そして、光が強くなった。アルはわくわくした心持ちで、出てくる物を待った。

そして、少しずつ、少しずつ、黒い固まりが見え始めた。硬質な感じがした。アルは黒いロボットでも召喚したのかな？ と、思った。

もう少し経った。アルは疑問に思った。なぜか、黒い糸みたいな物が二本、黒い塊のこちら側から出てきたのである。黒い塊も、四角い感じではなく、曲線が、背中のような場所に見えた。

そして、全てが見えた。

アルは絶句した。

何故か？

見えたのは、黒いロボットでも、ゴブリンでも、勿論ブラックドラゴンの様な名前からして強そうな物ではない

。出てきた物は、元の世界の一般的な呼び方をするなら、ゴキブリ……だった。

言葉が出ない。

わくわくして召喚したのに、出てきたのがゴキブリでした、では、落胆も大きいだろう。落胆し、アルは膝から崩れ落ちた。

そんなことも気にせず、出てきたゴキブリ、SEでの名前は *giant cockroach*、略してGCである。そいつは、何の害意もなく、アルの元へとよってきた。

その風貌は、オオゴキブリというゴキブリにしていた。主に森林に生息するゴキブリで、民家ではまず見ないだろう。民家にはいる



「お、おまえ、すげえな」

アルから出たのは純粹な賞賛だった。

ふと、その女の容貌をみる、髪の毛は金髪というより、綺麗な黄色をしていた。それは短いところで切られており、ショートヘアだった。その下にあるのは端正な顔立ちで、金髪よりの黄髪だといふのに、不純な感じが全くせず、顔全体で清楚だと言っても、過言ではなかった。

体は出ている筈のところはあまり出ていなく、同世代の女子と比べると発達していないが、まあ、そんなことは些細な問題だと思えるほど、清楚で綺麗で、可愛い顔だった。

まあ、残念なのはその美少女が満面の笑みでGC……見た目オオゴキブリを撫でてるところだったのだが。

オオゴキブリは幼少期に羽を共食いされることが多いが、このGCはシステム上羽があった。それがまた珍しいのか、女は羽を丹精に撫でていた。

「おーい、お嬢さん？」

ヒモ時代のテクニクを使って、なんとか女の興味をこっちに引き寄せようとする。

「はい、何でしょうか？」

「何で俺が召喚した、ゴキブリ？ を、一生懸命撫でているの？」

アルは聞いた。

「おお！ これは貴方が召喚した物でしたか！ もっと撫でていいですか！？ 後、ゴキブリではありません、ゴキ様です！」

アルを咎めるような口調で、エレンは言った。

「ああ……別にいいけど。名前はなんて言うんだい？」

「元の世界のは教えれませんが、こちらの名前だけで十分ですよ  
ね！ エレンと言います！」

因みに、ここまでの会話はアルはひきつった笑みで、エレンはゴキブリを撫でながら満面の笑みで進行していた。尤も、ゴキ様の部分では怒っていたが。

「ああ、俺はアルだ。まだゴキブリを撫でるのか？」

「いえ、こちらの世界では、ゴキ様ではなくGCというらしいですよ。私の情報網で、こちらの世界で、あの男の話が終わった後、ゴキ様に関連しそうなことはとりあえず調べました。GCとはgiant cockroachの略ですね！」

何がこいつをここまで駆り立てるんだ。そうアルは心の中でつっこんだが、なにか地雷な気がしたので、口には出さない。

「まあ、ゴキ……GCの話は置いて、何でおまえは……俺の召喚のところをみていたんだ？」

「ゴキ様のおいに駆られました！」

エレンは確かにそれが出来そうなほど興奮していた。だが、一瞬だけ目に後悔と反省が陰りとして見えた。

アルは、それを見逃さなかった。

「嘘だな」

「わっかつちやいましたか」

あきらめるように、GCをなでるのをやめて、エレンは下を向いた。

「まあ、情報収集ですね。それでもRPGとかよくやる口ですから。先ずはどれほどの情報を集めたかに掛かっていると思うんですね。なので、とりあえず最速で動いた人の中で、明確な意志を持つてそういう人を追跡することにしたんです。それがあなたですね」

神妙に、落ち着いた声色で、エレンは話した。

「なるほど。同意見だ。ただ……」

「なんです？」

エレンはアルの方を向いた。

「情報収集が大事なことは声の主だって、わかっているようだけ」

アルはデバイスをエレンの方へ放り投げようとした。だが、不思議

議なようにアルの手から、デバイスは離れなかった。

「え?」

「かなり間抜けですね……」

「た、たぶん、これは個人専用のデバイスで、盗みや、他人に譲ることへの処置だな。うん」

そう、独りでにアルは納得した。

「まあ、これだ」

そういいながら、アルはデバイスの画面を、エレンへと見せた。

そこには、某巨大掲示板風の掲示板。名前はsecond channel、略してセカチャンと呼んでね! みたいなことがかかれていた。

「え!?!」

その元となった某巨大掲示板を知らないわけではない。思わず驚愕の声を上げた。

「ほかにも……」

某眩き型SNSにている。second mutter。誰でも編集できる攻略サイトsecond wikiと、様々なsecondと冠についた、インターネット上のサイトを模したものを見つけていった。

「もう何人も書き込んでいるし、まだまだ他にもあるらしい。以外と情報収集はさせてくれるみたいだぞ。情報の独占も、しっかりメモ帳みたいな機能も付いているし、自分が歩いたところは地図で記録されている。ロープレの定番だな。あと、この街の地図は別で見つけた。他にも電話の機能はついているし、メールもついている。カメラもあるな」

みているものが目を疑う程度の勢いで、デバイスの機能をエレンに見せていく。

その早さと、内容に、エレンは驚愕が隠せなかった。

当然である。説明書を探しながらもアルは、しっかりとほかの機能の確認もしていたからだ……

### 三頭目、宿屋

アルとエレンは、宿屋にいた。

そりゃあ、見た目十六歳の男女二人が宿屋にいるのだから、何か不純なことが起こるかもしれない。

だが、今、この場で、それはなかった。

当然である、アルはゴキブリ……訂正。GCを満面の笑みで撫でているような女を抱くつもりは全く無いし、エレンの方でも、先ほど会ったばかりの得体の知れない男を抱くなど、全くもって考えられないことだった。

男が襲えばいいじゃないか。

そういう思考の暴虐者……失礼。紳士の方がいるかもしれない。

だが、この場でそれはできない。

何故か？

スキルのせいである。

アルのスキルは、盗賊、召喚、探索。盗賊はジョブスキルなので、サブスキルを三つ持つ。それは、隠密、投剣、短剣であった。対してエレンのスキルは、騎士、鍛冶、体術であった。騎士のサブスキルは、大槍、大盾、防御上昇。簡単にいうと、ダメージを与えるも、防御上昇で防がれ、なら力任せに襲うと、体術で投げ技を使われる。アルがエレンを襲える可能性は、万が一にもないのであった。実際、初期状態で変えることができる、自由なサブスキルスロットは一つあるのだが、アルやエレンが思っているよりも、スキルというものは高く、中々手が出せない額であった。サブスキルや、ジョブスキルが報酬のクエストもあるが、まだ冒険者ギルドに行っていない二人には知る由がない。

「おい、いつまで撫でているんだ」

「ああ、飽きるまで」  
のつけからんと、エレンは言い放った。

「おい。飽きるまでって、いつ消えるかわからないんだぞ。そのG  
」

実際、先ほどからずっと召喚しているが、まだ消えない。言った  
アルも、いつ消えるのが不安であった。

「まあ、大丈夫でしょ。消えたらまた召喚すればいいだけだし」

エレンは言った。撫でないという選択肢はないらしい。

「そいつを召喚するのに、MPの半分程度を喰うんだが……」

「だいじょうぶつしょ、たぶんここにはMP回復ポーションみたい  
なものがあるでしょ。宿屋もあつたし、冒険者ギルドみたいなこと  
も声の主は示唆していたしさ」

「宿屋だけで俺たち合計の所持金で、四分の一を失ったわけだが、  
例えばモンスターとの戦闘用のHP回復ポーションをかって、武器  
を買う、いくら余るかね？　そこで、GC如きを撫でるためにMP  
回復ポーションを買うのはもったいないとしか言いようがない」

問うように、アルが言う。事実、アルとエレンは、はじめからあ  
った千Gの内、五百Gを使っている。宿屋はもっとやすいものはあ  
るが、偶然二人が入ったのが高級宿だったということだろう。いや、

わざと二人は高級な宿に入ったのだ。現代人に、木製で満足に掃除がされていないベッドは中々使えないだろう。慣れることが必要なのは、二人とも分かっているが、一朝一夕に慣れることができるものではない。

というか、何故二人と一緒に宿屋などに泊まっているかが疑問の方はたくさんいるだろう。

それは何故か……

共闘したからである。

二人の目的は、まず、この世界の情報を集めること。それは一致した。なら、二人で一緒に情報を集めた方が早い。そう思うのは自然であった。もちろん、エレンがGCを撫でたいと思うのも一因だろうし、アルがエレンのような美少女を傍らに置いておきたいという男特有の性<sup>サガ</sup>も一因に入っているだろう。

だが、結論として二人が共闘を結ぶことは変わらなかった。

こちらに転移してきたのは三時間ほど前か。そして、もう日は沈んでいた。一時間ほど前に沈んだので、ちょうど元の季節の日の入りと同じくらいの時刻に日が沈んだことになる。

そのことから二人は、転移された時刻が元の世界と同じだと推測した。

なので、今日は行動する時間がない。そこで、とりあえず資金の節約の意味を兼ね、共闘関係になった二人で、同じ宿屋に泊まったのである。

「それで、明日からはどうするんだ？」

アルはエレンに聞いた。今まで全く明日の予定を聞いていなかったのである。まあ、エレンが延々とGCを撫でていたことも一因だろう。

「とりあえず、冒険者ギルドにでも行って、依頼を受けてくれば良くない？ 死ぬことはないし」

死ぬことはない。それはセカチヤンを知ったものには、確固たる事実として、知ることができた。

要するに、一人の男が、死んだと、書き込んだのである。

【あの男の説明が終わった後、俺は思わず街から飛び出し、北の森へ向かった。

そして、そこを通りかかった狼のようなモンスター。デバイスには、ウルフと書いてあったが、に、見つかったんだ。

当然何の考えもなく武器もなく飛び出してしまったので、俺に抵抗する力はなかった、そこで、俺は狼に喰い殺されたのさ。

死んだ。その時の俺はそう思った。だが、俺は、なぜか神殿にいた。そして、神殿から外に出ると、俺が知らない町並みが広がっていた。だが、転成者はたくさんいた。

後、神殿で、死んだときに自分の死んだ場所を、その神殿にすることが可能らしい。ただ、神父の話では、時々突拍子もないところへとばされることもあるとか。

このことから、俺は、この世界は死んでも神殿で生き返る。街はいくつもある。という仮説を立てた。誰か検証してくれ！】

そのような書き込みだった。

当然、二人はそれを疑った。だが、声の主は自分たちを殺そうと思えばいつでも殺せる筈だと考え、これを否定はできなかった。もちろん声の主が快樂殺人者で、絶望に彩られて死んでいく人間の顔を見たいという外道の可能性もあるが、とりあえずは信じることにした。一応神殿にも行き、生き返る場所の設定もした。

もう一つ、街が複数あることは、案外あっさりと決着が付いた。

掲示板に、自分が住んでいる街の名前の書き込みがあったのである。

サツポロ、カナザワ、ハチオウジ、シブヤ、ヒロシマ、等、自分たちがよく知っている街が多くあった。地図の上部に自分の街の名前が書き込まれているらしい。だが、形は違うということだった。

偶然にもその街出身の人間が居たのである。

街が複数あるのはほぼ決定となった。まだ確定ではないが、街が一つでも二つでも、俺たちが死ぬ確率はあまり変わらない。NPCがやっている店の在庫的なものは無限にあるらしく、人間らしい受け答えができ、完璧なAIだが、価格を安くしたりはしなく、少し高めの設定らしいので、何か稼ぎを得れば、飢えることはあるまい。

ということ、稼ぎを得るため、アルとエレンの二人は、冒険者となって、モンスターを狩ることを決意したのである。まだモンスターを倒したという報告はセカチャンに無いが、まあ、自分たちが倒せばわかるだろう。剥ぎ取りの技術がないのが、若干の不安であったが。

「ところで今日はどうする？」

何気なくアルは聞いた。

「とりあえず、今から飯にいけばいいでしょ？ 受付の人から、飯は用意してくれるらしいし」

「まだ、酒場とかはいかなくていいよな」

続けてアルは質問をする。

「金ができてから。後、数日たたないと得た情報に差が出ないですよ。それに、人に無償で教えるような情報は、まずセカチャンに流すと思うし、流れたら、セカウィキに載るでしょ？　なら酒場で得れる情報は隠しておきたい情報って訳で、聞くにはお金でも積まないとじゃない？　なら、金は貯めていかないと」

「それもそうか」

納得して、アルと、エレンは、食事を食べに、一階の食堂兼夜間酒場へと、足を運んだ。

目の前に並んだのは、シチューだった。お皿も高級そうで、まったく不潔なイメージがなかった。

それでいて量も多く、現代人の二人でさえ、満足できる食事だった。

シチューのほかにも、肉やパンなども並んでいる。

「豪華ね……」

思わずエレンはつぶやいていた。

「風呂もあったし、生活水準は元の世界程度あるみたいだな……ネ

「ツトもあるし、ゲームは……この世界がゲームだな」

ネットは、ホームページでさえ作れる仕様だった。今まで少しでもweb制作などに携わった人なら、案外簡単にいくものかもしれない。だが、そんなことヒモニートだったアルにはわからなかったし、エレンもわかりそうもなかった。

「確かにねー。風呂は先に入っていていいわよね？」

「ああ。別にいいぞ。なんなら一緒にでも」

「セクハラはやめてよね」

「ああ、そうかい。すいませんでした」

全く反省の色が見えない棒読みの口調でアルが答えた。

「にしてもおいしいわね」

スプーンを運びながらエレンがいった。

「だな」

そうアルが答える。

思ったよりもSEでの生活は、高水準になりそうだ。

衣擦れの音が聞こえてきた。否、衣擦れの音を聞いていた。こんな時にセカチャンや、セカッター（セカンドムツターの事だが、仕様が余りにも某眩きSNSと似ているため、この略称になっているのである）や、セカウイキを見ているほど、俺は衰えていない。元の世界でもまだ二十代だ。彼女に三ヶ月前に振られ、金の供給源が一つ減った二十代だ。

見た目十六歳（実際年齢不明）の美少女の、服を脱ぐ音を聞かないで、なにを聞き、なにを見ろというのだ。

さすがに性欲余った高校生や中学生みたいに突撃などバカなことはいらない。

ドアの前で、衣擦れの音を聞ければ満足なのである。  
と、アルは延々と思考をしていた。

もちろんそんな時間を悠長にエレンが待つはずはなく、湯船からは鼻歌が聞こえる。

その音を聞いて、自分が前半の着替えの音しか聞くことができなかつたことに、アルは気づいた。

なんと……失態！！！！

暇つぶしに湯船の方にGCでも忍ばせようと思ったが、逆に喜びそうなので取りやめにして、のんびり情報サイトを見ていたのだった。

「でたわよー」

甲高いエレンの声が、宿屋の一室に響いた。

瞬間。アルの脳は全速力で周り始めた。

始まりばかりではない……終わりもまたエロい、と……！！

バスタオル一枚に「見ないで……」と、頬を赤らめながら言う少女のなんと可憐なことか……！！

前世で某大型掲示板があったら、思わずスレ立てする勢いである。いや、セカチヤンでもいいかもしれない。ばれるけど。

先ほどの失敗を生かし、最高速度で思考をし、バスルームの前へ向かった。だが……

すでに服は着替えた後だった。

うん、声を発する前に着替えが終わっていたんだね。

着替えは何故かデバイスから出せた。何故だろう。デバイスのアイテム欄に入っているものは、自由に出せるらしい。それに、いろいろなものデバイスに入れることができるらしいから、以外と便利だ。

と、無駄な思考で思考の落胆を妨げた。

「じゃあ、俺もはいるわー。のぞくなよー」

「こっちのセリフだ！」

もちろんセクハラも忘れなかった。



G Cはオオゴキブリを模して作られた生だ。背中側に有る甲殻は堅く、多くの攻撃を弾くことが出来る。

だが……腹部は？

もちろん足の部分などは甲殻に匹敵するほど堅い。だが、普通の腹部なら、簡単に貫かれるだろう。

「退け！……！！！！！！」

アルの命令が、狭く、じめじめとしていて、薄暗いダンジョン内に響いた。壁は音を反射している。

その声がG Cに届いた瞬間、G Cは背中にある羽をはためかせた。

ゴブリンが斬りつけようとしたナイフは……後一步で、届かない。

そのままG Cは空の上方へと回避。遠距離の攻撃手段を持っていないため、攻撃は出来なくなった。

だがそこに、エレンが突っ込む。

大槍初級アビリティ、【突撃】。

初期状態で覚えるそのアビリティ、成し遂げるための技術は、単純だった。

速く。疾風く（はやく）。

大槍は、リーチを稼げ、白兵戦では最強と言われる。だが、課題として残っているのが機動力だ。

だが、【突進】は、単純な直線の速さなら、アビリティの中でも速い方だ。

それを使い、ゴブリンとの距離を、エレンは一瞬で詰めた。それはゴブリンが着けていた、革鎧が破けた……腹部を刺した。

「ぐがあああああああああ……!!!!」

ゴブリンが断末魔の悲鳴をあげる。それと同時に、ゴブリンはドット調のモザイクをかけたみたいな体へと変化。そして、その一つのモザイクが一瞬で空中へと飛散した。

ポトンッ。

一つのアイテムが落ちた。それはよく見ると、ナイフと書かれていた。

「後、七匹か……」

冷静にアルがつぶやく。

「あんたも少しは仕事しなさいよ……というかまたナイフか……一個くらいゴブリンの証がでないものかね」

ゴブリンが落としたドロップアイテム、ナイフを拾いながら、エレンが言った。

「ちゃんとGCを出して働いているだろう？ 俺は短剣での攻撃程度しか出来ないからな。あと、レアアイテムがそんな簡単に出たらバランス崩壊だ」

「まあ、そうね。短剣じゃ、ゴブリンを倒すのにも三発位要るわね」  
「ああ、短剣のアビリティはそこまで強くないからな。投剣を使うと武器がなくなるし」

「まあ、私とGC様だけで何とか倒せるから、ゆっくりしていいと思うわよ？ MP回復してくれないと、GCがでてこれないし」

「ああ、すまん」

彼らは、ゴブリンの討伐任務についていたのであった……

朝。光がカーテンの隙間から射し込んでいる。

「朝か……」

日光を感じながら朝を起きたのは何時ぶりだろうか、と、たわいもないことをアルは考えた。

多分ヒモが出来なくなって以来だな。

ヒモの頃はまだ休日は早起きだった。終わってから昨日まではお昼起きだ。

「ふうふう……」

隣のベッドでは、エレンが手を上に伸ばしながら、瞼を押し開けていた。

「おはよ。今日も可愛いね」

思わずヒト時代の習性が出て、一緒に起きた異性にキザな台詞を言ってしまう。

「セクハラ？」

それを聞いて一瞬で瞼を開け、覚醒したエレン。

「いやいや、余りに可愛くて、つい、ね」

「ついじゃねーよ。セクハラで訴えるぞ」

「こつちには警察なんて愛をじゃまする無駄な機関はないよ？ さあ、一緒に愛の逃避行を……」

「余りにぶざけてると……投げるぞ？」

流石に体術スキル持ちに喧嘩を売るほど馬鹿ではないのか、アルは言葉を黙らせる。

それをみながらエレンはいい気になって、  
「着替えるから覗くなよー」  
と、言った。

今なら昨日のように着替えの音を聞けるように、ぎりぎりまで接

近されることはないだろう。

その謎の安心感を持ちながら、エレンは着替えに行った。

「まあ、流石に覗くほど節操無しじゃないさ」

そう、軽口を叩きながら、のんびりとアルはベッドに寝ころんだ。

「やっぱり、あそこの飯はうまいなー」

道で、アルは思わず呟いた。

「高級な宿屋に泊まっただけあったわねー。おかげで財布はかなり薄くなったけど」

「別に一人二百五十Gだろう？ 大した出費じゃあるまい。ゴブリン十匹倒す依頼で千G稼げるらしいし」

「まあ、それもそうね……っつと」

エレンは足を止めた。目的地に着いたのだ。

「おっつっ」

先行していたアルも、エレンが居る位置に戻った。

そこには、木造の建築物があった。三角の屋根。丸い扉。立て掛  
けられた表札。

「冒険者ギルド……か」

それを見て、思わずアルは言った。

「まあ、早く入らない？ 時間は無限じゃないんだし」

エレンはアルを急かす。

「といっても、あの声の主が言うには、不老で不死なんだろう？  
急ぐこともあるまい」

「わくわくするじゃない！ あの、ファンタジー小説とかでよく見  
た、冒険者ギルドよ！」

確かに胸の高鳴りは、アルも感じていた。ニートによって得た豊  
富な時間。それはもちろん数多くのファンタジー小説にも向けられ  
ていた。

「そうだな。入るか」

アルはエレンに同意して、その丸い扉を開けた。

多くの人が居る。

アルがギルドに入って最初に得た感想はそれだった。

現状に気づいている、元の世界でファンタジー的なことを少しでも知っていた人間がたどり着く場所。

それがアルの感想だった。

誰の目もわくわくとしていて、希望を感じ取れた。

このはじめの街のギルドから少しずつ成り上がり、一人の勇者となって、約八千万人も人間を元の世界に返す。

そんな希望に溢れていた。

だが、アルには勇者願望が余り無く、ただ、現状を満足がいく生活にしたいだけだった。正直このSEで強くなっても、半分ニートの生活で、時々依頼を受けて暮らせばいいか程度に思っている。

微妙に無欲なのであった。

「こんにちは、血を垂らす【雰囲気重視コース】と、簡易的なやりとりで終わる、【簡易式コース】どちらでギルド登録をやられますか？」

美女といっても差し支えがない程度の要望を持つ受付が、アルと

エレンに話しかけた。

もったも、美女といっても、平均よりは上だけど、絶賛してほめる程度ではないというレベルで美女だった。

この世界の若い二十代くらいのNPCは、ノンプレイヤーキャラクター大概がそんな感じで、美女か美女じゃないかと言われれば、まあ、美女だけど、絶世の美女かと聞かれれば、NOと答える。そんな容姿だった。

ちなみにおばちゃんみたいなキャラクターは、どっからどうみてもおばちゃんというような感想しか出せないほどの、おばちゃんだった。

多分絶世の美女とか、そういう容姿的な設定がつくような重要なNPCではない限り、平均より上程度の容姿なのだろう。

勝手にアルは納得した。

「どっつする？」

何かを羨望するような目で、こちらを上目遣いに見上げてきたのは……エレンだ。

軽くキャラ変わってねーかなーと、アルは心の中で毒づいた。

まあ、ファンタジーに少しでも触れていた人間なら、この世界は嬉しいのだろう。アルだって楽しんでる。

「かんに……」

だが、面倒なので簡易式と選ぼうとした。

俺は選ぼうとしたんだ。

空気が変わった。

エレンは、一瞬で冷たい空気を放ち始めた。それを左側の肌全部で感じて、アルは戦慄した。

この殺気……やばい！

多分、このまま簡易式を選んだら、パーティー解消されるだろう。そう思わせるだけのさっきだった。

「雰囲気重視でお願いします」

そう言わざるを得なかったのだ。

「はい、ではこのナイフでこちらの紙に血を垂らしてください」

ギルドの受付が、アルとエレンに指示をした。

エレンは、とても嬉しそうな顔で、爛々と輝いた瞳で、ナイフを右手の指に刺した。

そのままポトリ……と、羊皮紙の上に、血が一滴落ちた。

ちなみにこの世界にはふつ々の紙がある。宿屋で確認済みだ。しかもかなりやすいらしい。

アルも仕方なくナイフを右手の人差し指に刺し、血を垂らした。

「はい。これでこのデバイスと、そちらのデバイスを交信するので、少しお待ちくださいね」

この世界の文化レベルが意味不明だ。というより、多分これは俺

や、エレン等の転生者用に作られた世界なのだろう。文化水準や、意味もないギルドの二択から、アルはそう仮説を立てた。

「はい。これで完了です。そちらのデバイスにギルド用のデータを送信しました。後で必ず規則等を確認してくださいね」

「はい、わかりました！」

なんで、こんな嬉しそうなんだろうなあと、アルは心の中でため息をついた。

「では、登録記念として、武器を一つプレゼントしておきました。エレンさんは、大槍を、アルさんは、短剣です」

「ありがとうございます」

「では、今から何かクエストをお受けしますか？ クエストはデバイスで確認可能となっております。雰囲気を楽しみたい方は、しっかりとボードに、羊皮紙で、ナイフでくりつけてありますので、そちらでご確認ください」

なんでここまで雰囲気こだわるのだろうか、と、アルは一人苦笑した。そして、デバイスの依頼を見ようと思ったのだが……  
左からくる視線が怖い。

「依頼……見に行くか？」

そうアルが聞くと、睨むような目を満面の笑みに変えて、

「うん！」

と、エレンは頷いた。

こいつはどこまでこっちを楽しむんだよと、アルは少し呆れた。

「うん、うん……」

「もうゴブリン十匹でいいだろう……」

エレンはボードの前で延々と声を唸らせながら悩んでいた。アルはそれを見て呆れ気味にゴブリンの討伐でいいだと促している。

「だって、だってさあ！ リザードマンだよ！！！！ あの又メ又メした鱗と、手に持っている槍と盾の対比がとても格好いい、あのリザードマンだよ！！！！」

なぜこいつはリザードマンでここまで興奮できるのだろうかと、アルは疑問に思うが、それは個人の趣味趣向なので、口に出すことはしない。

「リザードマンはギルドランクE以上推奨だろう……まだSEにきてから一日も経っていない俺らが受けるには難しすぎる。始めは初級のゴブリンで十分だろう。ファンタジーで最初の敵は、ゴブリンと決まっているだろう？ 古今東西いろいろなファンタジー転移小説があるが、半分くらいは序盤でゴブリンと戦っていただろう？」

おまえはその美しき伝統を汚すのか？」

因みに、エレンは二十分以上も悩んでいる。その間にアルは、ギルドの規約やらなにやらをとくに読み終わり、早く行きたい心の中を押さえつけながら、何とかエレンを説得しているのである。

だが、簡単にいっても聞きそうがない。なら、エレンが無駄に大事にしている様式美のようなものにつけ込むのはどうだろうかと思っただけである。

それを聞いたエレンは、すこしゴブリンに心が傾いたように、ゴブリンの方の依頼を見始めた。

「よし、わかった！ ゴブリンにしよう！」

そうエレンは決意して、ナイフが刺さっていることも気にせず、依頼をバリバリとはがした。これも様式美なのだろうか、アルは疑問に思ったが、口を出しても仕方がない。とりあえず黙っていた。

「はい。ゴブリン十匹の討伐ですね。ゴブリンはこの街の北西にある、洞窟のようなダンジョンに生息しております。では、依頼の成功を祈っております」

そういうと、受付の彼女は自分のデバイスを操作した。

こちらのデバイスのギルドの画面に、依頼を受けていますというような表示が出た。

そして、アルとエレンの二人の依頼が始まったのである。

## 五頭目、決意

「後……五匹！……！！！」

エレンの声がダンジョン内部に響いた。残りのゴブリンの討伐数は、半分へと減っていた。だが、戦術の中核である、GCのHPが心ともない。

アルとエレンの戦法は至極単純だった。召喚され、アルの言うことを全て聞くGCを囷にし、ゴブリンに噛み付きでダメージを与える。そして、ゴブリンが大ぶりの攻撃を繰り返そうとしたら、GCを羽を使って飛ばさせ、回避。そして、そこに出来た隙へと、エレンが【突進】。

だが、これには明確な弱点が存在がする。

ゴブリンが大ぶりの攻撃をしないと、隙ができないのである。

そして、五頭目……今、エレンが倒したゴブリンは、中々大ぶりの攻撃をしなかったのである。小さな攻撃を、延々とGCに向かつて行う。

待つこと十分。やっと大ぶりの攻撃を繰り返したが、その時既にGCのHPも減ヒットポイントっていて、こころなしに黒く光る背中も、萎れたように見えた。

「おい、エレン。GCのHPが結構減っている。どうする……？」

思わずアルがエレンに聞いた。

「とりあえず、新しいのは出せる？」

「ああ、あと一匹が限界だがな」

「じゃあ、お願い」

そう言われると、アルはMPを抽出し、言葉を紡ぎ始めた。

「《魔、界、在、黒、光、速、蝕、飛、出、現》」

アルの目の前に円陣が出現した。そこからは少しずつ黒い背中…  
…甲殻が見えてくる。それは光っていて、メタリックな雰囲気、  
少しあった。

「なんで、出る前はこんな凄そうなのに、出たら残念なんだろうな」

アルが言う。

「ちょっと!!!!!!　ゴキ様は残念なんかじゃないわ！　訂正を  
要求する！」

「ハイハイ。ゴキサマハザンネンデハアリマセン」

「棒読みじゃない！」

コント的な会話を二人がしているうちに、GCは召喚されたよう  
だった。

それを見ると、一瞬でエレンは満面の笑を顔に浮かべて、  
「まあ、あなたのおかげでゴキ様が見れるんだから、別に感謝しな  
いこともないからね！」

と、顔を別に赤らめずに言った。いや、GCへの関心で、少し赤

みを帯びているかもしれない。

「どんなテンプレツンデレだよ」

「わざとよ……」

素っ気なくエレンが言った。

「はあ、まあ、次のゴブリンでもさがすか」

と、アルは周りを見渡す。

「そうね」

と、エレンも同意した。だが、

「いや、その必要はなくなったようだぜ……」

思わせぶりな態度で、アルが言った。

「え？」

思わずエレンが疑問の声を上げた。だが、それを気にせず、アルは右手で腰からナイフを取り出した。

「GC!!!!!!!!!!!!!! 俺の後方に居るゴブリンへ襲え！ 俺が先  
行する！」

ファンタジー世界に来たのに、ファンタジーっぽいことをゴキブリ風生物の召喚しかしていなかったストレスが、ここになって発揮

されたのかと思うほどの勢いで、アルは短剣をゴブリンの腹に刺した。

その動きは流麗で、美しかった。

短剣アビリティ【ファス・アバトレ】

その動きは、見るものを圧倒した。

そして、使ったアル自身も、歓喜に満ちた。

体の中から欲望が渦巻くような感覚。それがアルを支配した。武器を振るえることの嬉しさ。元の世界との違い。こちらでは、SEでは、縛られず、振るえる!!!!!!

元の世界で、ニートとして約三ヶ月は引きこもっていた。その感情が、爆発している。

それはこちらの、SEの世界への喜びにも代わり、アルを支配していた。

もう一発!

【ファス・アバトレ】

ファス前方へ……刺す(アバトレ)!!!!!!!!!!!!!!

もう一回。

【ファス・アバトレ】

ゴブリンが、HPを無くし、データのような四角となって、飛散した。

そこから出てきたのは、【ゴブリンの証】。

紛れもないレアアイテムであった。それを拾いながら、アルはつぶやいた。

「戻りたくない……元の世界に、戻るもんか……」

「戻りたくない……元の世界に、戻るもんか……」

アルが放った言葉は、不思議なほどエレンの耳に、澄んで入った。今の、狂気のような戦闘と一緒に。

「やべえ。結構疲れたな」

アルはふらついた。

「だ、大丈夫!？」

思わずエレンが叫んだ。

「ああ、何とか。にしても、証か。ラッキーだな」

アルは、足下にオブジェクトとして光りながら転がっていた証を手を取った。

「格好いいわね」

エレンもそう思った。ワッペンのような形の【証】は、淡い緑色だった。ゴブリンの意志が込められている気がして、思わず感嘆の声漏れそうだった。そして……

「あのさ……」

「うん、どうした？」

アルがこちらに振り向く。右手に持った【証】は持ったままだ。

「あ、そうだ。証は俺が貰っちゃっていい？」

「うん。いいよ」

少しアルに話を逸らされた。

でも、話を戻す。

「元の世界に……帰らないの？」

思わず聞いてしまう。いや、思わずではない。アルが先ほどの言葉の口にしていてから、ずっと考えていた。

「え、あれ？ あれって、口に出てたの!？」

目で簡単にわかるくらいに、アルが狼狽した。

「うん。ばっちり聞こえてたよ……」

答えを待つように、エレンは聞いた。

アルの右手が彼の赤毛の髪の毛へと上がり、かきむしり始めた。

「ええっ……と……」

言葉を探しているようだ。だが、こちらにも言葉はない。

「うん……さっきの戦闘で、そう、思った。俺、元の世界でニートだからさ。こっちの世界の方が、今日一日で楽しいと思った。だから、俺は、戻らない」

彼の決意は、不思議と彼女の心の中へと入っていった。

「でもっ！ 元の世界に残してきた人はっ！」

エレンは沈痛な叫びを放つ。それは救いでもあつたし、棘でもあつた。

「それは……あんまりいない。ここ三ヶ月で関わっていたのは、カーチャンと、時々トーチチャンと、ネット上の匿名の方々だけだよ。俺は……ニートだったからね」

ニート。エレンは、それをどこか別の世界のものだと感じていた。「このまま勉強しないと、ニートになるぞ」

親も、友達も、ゴキブリのことや、ファンタジー小説、ゲーム、そればかりやっていて高校生になったエレンに、そうだった。だが、彼女はニートに私が成るはずはないと、高をくくり、自堕落な高校生活を送っていたのである。ゴキブリオタクということで、虐められ、登校もままならなかった。

果たして、そんな世界に……帰りたいか？

一筋の楔として、それは彼女の心の奥底へと放たれ、刺さった。

「こつちの世界の方が……楽しいの？」

「少なくとも、俺にとってはね。向こうの世界に戻りたくは……無  
い」

「でも、こんな生活じゃ……いつ死ぬかわからないじゃん!？」

「システムの……死ぬことはなさそうじゃないか」

それは彼女だつて分かっていた。殺せる手段があるなら、すぐ殺せばいいじゃないか。そう声の主や、その仲間と言ってやりたかった。でも、殺さないということは、まず死なない。GMたちの意志が変わらなければ。

「本当に……こつちなら……虐められないの？」

「最低でも俺は、虐めないぜ。お前と一緒に入れて、俺は有り難いと思ってる。こんな元ヒモニートだしな」

「じゃあ、私も……」

その瞬間、エレンの決意は固まった。そのときに思い浮かんだのは、母さんと父さんの顔だった。不登校になる前は、「もつと勉強をしろ」と、言っていて、なった後は、「学校に行かないで恥ずかしくないのか!」迷惑をかけていた。反省したい。でも、勉強以外

にも、私の生きる道はあったと思う。

次に浮かんできたのは、友人だった子たちだった。今はいじめっ子といじめられっ子に別れている。いや、今も友達かもしれない。何故なら浮かんできた顔は……友達だったときの、笑顔だったから。

でも、もう友達の笑顔は戻ってこないし。「勉強しなさい」といながらも、暖かい食卓を作ってくれた家族とも会えない。もう、無くなった。毎日が冷えた食卓で、友達とは会えない。そんな元の世界に、戻る価値なんて……ない。

「私も……こつちに残るよ……そして……人間を戻さない。クリアを……妨害しよう?」

そこには、せめてもの、少しだけでもの、復讐も込められていた。

「もちろんさ。これから俺たちは、クリアを妨害する。そのために動く。俺たちの通称でも決めようぜ。なんかかけーじゃん」

その意見には同意だった。ギルド機能もあるので、いつかは作りたい。クリア阻止の人間たちで。

「そうだな……」

勿体ぶりながらアルが言った。

「アフマル・ハシヤラとか、どうだ?」

「どんな意味?」

「赤い虫」

何故か格好いいと思った。それは赤にまみれたゴキブリの甲殻を想像したからかもしれない。

赤くまみれ、虐げられていても、自分の本分を全うし、生を貪欲に得続けるゴキブリに、少しずつ重なっていくた。

だからそれに……

「いいね」

と、言ったのであった。



アルは言った。そう、これでエレンとアルの初仕事は終了したのである。アルはデバイスを出し、右下に表示された時刻をみた。

既に昼は回っており、一時はすぎている。

「昼飯どうする？」

朝は食ったとしても、昼飯はまだ食べていなかったなので、アルは聞いた。

「ゴブリンの肉とか食べる？」

「遠慮しとく……」

流石に、今まで自分と死闘をしていた相手の肉を食べるのは、些か抵抗があるらしい。

ゴブリンのドロップアイテムは、【ゴブリンの証】、【錆びた○  
「欠けたナイフ」×3、【破れた革鎧】×2、【ゴブリンの肉】×  
3だった。最後のゴブリンからのドロップも、【ゴブリンの肉】だ  
った。

「別に街は直ぐなんだし、戻ってから食おうぜ。そして、宿屋に戻  
って、作戦会議だ」

アルは、少し上機嫌な調子で言った。依頼の達成感がこみ上げて  
いるのだろう。元の世界でバイトの経験が少しだけの、勤労経験の  
彼には、思ったよりもうれしいものだった。

「そうね……昨日泊まった宿屋にまた泊まれるわよね？」

「大丈夫だ。今日出る前に、しつかりもう一日入れといた。セカチヤンとか見てると、宿屋は酷い有様らしいからな」

事実、安物の宿屋は、一回に十部屋、それが地下入れて12階。

計120部屋のホテル的な場所だった。そこまで聞くと、清潔感あふれる、現代のを想像する方が多いと思うが、部屋の外はきれいなのに、入ってみるとシーツに汚れはついているわ、風呂は汚いわ、そもそも飯は出ないわで、散々な有様だったようだ。

其れについてセカチヤンでグチっている奴は多くいたし、

【宿屋改善の要求や、宿屋について話し合うスレ】

まで、立っているのだ。それに対する不満は大きい。

しかもその宿屋は、何故か街の中に七十力所も集中して広がっていた。そして、俺たちのような10部屋しかない高級宿屋は十件あった。

まあ、アルたちみたいに二人以上で高級宿屋に泊まった奴も多いらしい。

「それはGグッジョブと言わざるを得ないわね。ありがとう」

「どういたしましてと。多分高級宿なら昼飯は金払えばくれると思っし、いくか」

「そっしましよっ」

そう言うと、アルは探索者スキルのアビリティである【探索】を

発動させた。これは周囲に敵や人が居ないのかを調べる、汎用性あるアビリティだ。探索者スキルをあげれば範囲を上げれば、【探索】できる範囲も広がるらしい。

「とりあえず、敵さんは見えないな。ゴキブリ先導で行くか」

「ゴキブリじゃないく、ゴキ様。あと、こっちの世界ではGC様」

しまったと言ったような顔をアルは浮かべた。結構これをやった後のエレンは機嫌が悪くなるのだ。

まあ、それにかまう義理もないので、とりあえずスタスタと出口に向かい進み始めた。

「え、ちょっと！ 待って！」

後ろから仲間の声が聞こえるが、とりあえず無視することにしよ。赤い虫だけに。

「やっぱり旨かったな」

満腹だった。アルもエレンも。やはりというか何というか、まあ、理由なんてどうでも良くなるほどに、高級宿の飯は旨かった。因みに、ここの宿屋の名前は【極楽浄土】と言っらしかった。



「嘘……でしょ？」

セカチャンには祭りが広がっていた。ここが日本列島と酷似していることがわかり、自分たちが居る場所がだいたいわかったのだ。歓喜を表す者も少なくあるまい。

「そして、街の数は、940個だと、推測されている。微妙に発見されていないところがいくつかあるが、各県二十個の街がある。それは街の広場の近くにあった地図の上に書いてある、街の名前から、その県に住んでいた人が推測している」

デバイスのセカチャンやセカウイキにも、それと遜色がないことが載っていた。

「でも……なんで、外国に……？」

「多分だけど、日本にいてもクリアは出来ない。何故なら、ほぼ全体が俺たちによって網羅される確率が高いからだ。日本にラスボスが居ると仮定した場合、どこかのダンジョンの最下層に居ると考えるのが普通だが、まだ幾つあるのかすら判明していないダンジョンを風潰しに探して、ボスを探していたんじゃ、偶然ボスにあった奴に倒されるかもしれない」

「でも、ボスをわざわざ探すことは……」

エレンが思わず聞く。だが、少しアルは呆れたような表情をして、エレンの方を向いた。

「考えて見る。俺たちはクリアを阻止したいんだ。なのにクリア条

件や、クリアできる場所を知らず、一生日本に閉じこもってました、じゃ、自称勇者様とかに討伐されるに決まってんだろ?」

「あ、そうか」

確かにそうだった。守るべき者がわからないのに、守るなど、不可能に近い。

「俺は、日本のダンジョンは最深部に行けば、海を渡る手段が有ると思っっている。そして、外国に進ませ、ボスを捜させる。ベターなやり方だ」

「なら、ダンジョンの攻略をするの?」

アルは首を振った。

「いや、俺らは、スキルを使ってショートカットをしようと思う。俺の召喚師があれば、多分行ける」

「え? なんで召喚師で海を渡るの?」

「まあ、今のままじゃ厳しい。とりあえず金と、武器がほしいな。渡った後の戦闘用だ。渡るのに金は多くいる」

「なんで、渡るのに……金?」

「MP回復ポーションだよ。三時間で俺のGCは消える。その補充は必要だ。後、二匹では厳しいだろうしな。金稼ぎと同時でスキルレベルも上げればいいんだが」

「なるほど」

GCという言葉が出てきた時点で、エレンはアルが話そうとしていることがわかった。多分だが、GCを飛ばせ、エレンとアルを掴ませ、それで海を渡るうとしているのだ。

「ああ、いい忘れていたが、何とかしてかごみたいな物を作るぞ。それにロープとかツタとかを巻いて、それをGCに掴ませる。ゴキブリ型気球だな」

なんとも奇妙な光景だが、アルは真面目にGCを気球の浮かぶ部分と、進行させる部分に使おうと思っていた。

「じゃあ、とりあえず、どうするの？　今すぐ飛ぶ訳じゃないでしょ？」

まあ、それはあくまで目標であり、指針だ。いまから行うことはその指針に沿ったことをやるだろう。それは予測できた。だが、なにを具体的にやるのかは、聞きたかった。

「とりあえず……金策、レベル上げ、乗る部分の作成くらいかな。乗る部分の作成には、金もいくらか必要だろうから、とりあえず一週間から二週間を目標に、金を貯める。そして、その課程でレベル上げもする。で、最後に乗る部分を作るか買うかして、外国へひとつ飛び。これで完璧だ」

「じゃ、とりあえず明日からがんばって、今日は寝ましょ」

と、エレンは、そそくさと風呂へ行った。

「まあ、それもそうだな。俺は情報収集でもしているよ」

そして、アルもデバイスをいじり始めた。

これで、二日目でアルとエレンの二人の行動方針は決定したのである。

## 七頭目、社畜（前書き）

六頭目までを、一部改訂しました。話の大筋にはあまり関わりはありません。ですが、アルがGCを召喚できる時間が一時間 三時間に変わりました。

これからもよろしくお願いします。

## 七頭目、社畜

セカンドアースにやってきてから、三日目の朝を迎えた。

太陽は、秋でも春でもない今日の空の下で、真東から少しズレた位置に昇っていた。アルはSEでも、元の世界と同じような朝日は昇るんだなあと、思った。

だが、そんな事を悠長に考えている間に、時間は過ぎていく。

「さて、探すか」

日課にもなり始めた、朝のセカチャンと、セカウイキのチェックを、アルは始めた。

「で、これから何すんの？」

道路でエレンは、アルに質問した。アルは言葉を濁し、

「うん。とりあえず冒険者ギルドだな」

と、言った。明言していないアルの言葉に、エレンは少々苛立ったが、こんな些細なことで癩癩を起こしては仕方がないと思い、平常通りの顔色に戻した。ただ、微細な顔の変化も、アルには見通されていた。

「苛立つか？」

「まあ、ちょっとはね。やることくらいは知りたいし」

「自分で考えやがれ」

だが、アルの方もエレンが痙攣を起こしたかどうかなど、些細な出来事であり、わざわざ意識を傾けるほどではなかった。

まあ、そんなアルの感情などどうでも良く、態々聞かれて、答えたのに、落とされたエレンが起こるのは当然のことだ、

「聞いたんなら答えなさいよ！」

と、声を荒らげるのも仕方がないことだと思えた。

「まあ、いいじゃないか」

「よくないわよ！」

「そんなに苛々していると禿げるぞ」

「女は基本的に禿げないわよ！」

「これが女尊男卑か……」

「ネットスラング使うな！」

「ついたな」

アルが上の方を見上げた。そこには昨日行った冒険者ギルドと同

じような模様、というより、全く同じ模様があった。同然だ。同じ場所なんだから。

「そうだね」

とりあえず二人は、扉を開けて、中に入り、手頃な依頼を探すことにした。

苛立つ。元の世界の名前が、鈴木健一郎。SEでは、安易に名字を名前としてしまい、スズキという名前の彼は、男女の二人組が入ってくるなり心の中で毒づいた。

リア充死ねとも思った。

この世界の人間がみんな十六歳になっても不細工な人間は不細工であり、スズキは自他共に認める不細工であった。元の世界の彼はちっぽけな業績を誇る程度の、サービス残業を普通にこなし、有給は提出する前からどうやって提出するのかもわからず。延々とプログラムを打ち込んでも、社内情勢など全くわからないので、出世することもなく、飲み会に行っても飲めないの、上司からは嫌われ、要するにアルから見たら完全な社畜であった。社畜とは、現代の貴族から見て、自分たちのために社会の歯車を回してくれている、かわいそうな人のことを指している。

まあ、そんな社畜で、新しい世界でも特に目立った功績はなく、

せいぜい依頼を二日目に受けたけど予想以上に怖くて戦えなかった人間である。というか、スキルがソコ向きではなかった。無理だ。バフにデバフはもつてのこいで、攻撃魔法まで使えたが、ゴブリンと接近戦で戦えるほどの能力は持っていなかった。というか、近接スキルがなかった。魔法スキルがジョブ一つと、サブ一つで二つと製作とか、生産系のスキルが一つだ。もちろん新しくスキルを買う金とか、あるはずもない。

こつちで、どう生活をしようかなあ……

途方に暮れている。

ふと、スズキは前を見た。そうすると、男女二人連れのリア充が、こちらへ向かっている。

いや、きつと思いつた。俺が座っている酒場の椅子は、近くにボードがある。きつと受付に聞くより、ボードで見る方がいちやいちゃできると感じたのだろう。

そして、スズキはまた思考の渦へと、感覚を埋めた。  
なんとかして、金を稼がねーとなー

ギルドの中に入ったアルは、辺りを見渡した。昨日よりは人数が少なかった。うなだれている人も少し見られる。

「ボード行くか？」

「うん！」

エレンは上機嫌で頷いた。雰囲気を大事にする必要を、アルは全く感じていない。だが、大筋を自分で指示しているので、なかなか細かいところ位は、エレンに決めさせようという意志が働いているのである。

「仕方ないか……」

小さな声でつぶやいて、ボードに向かうことにした。

ふと、ボードの方を見ると、こちらを恨めしそうに見ている男性がいた。

お世辞にもイケメンとは言えない顔だが、十六歳にしては、なかなか辛そうな顔をしている。

もちろん、SEは、元の世界で辛い立場だった人も多くいるのだから、元の世界の十六歳よりは、大人びた雰囲気を持つ十六歳が多い。

だが、彼の苦労は並大抵では無さそうだった。

アルはほとんど元の世界で苦労していない。

いや、彼は彼なりの苦労が多くあった。だが、苦労をあまりしておらず、社会人としての経験は、あまりないというのが実情である。

「おい、エレン」

「何？」

「新しい仲間でも、誘うか」

アルは、こちらを恨めしげににらんでいる彼を、スカウトする  
ことにしたのである。

「ちよつといいですか？」

スズキは声をかけられた。とりあえず思考の渦に放り込んでおいた感覚を元に戻す。そして、営業スマイルを浮かべる。といっても、この営業スマイルは、酷く歪んで見えるらしい。悲しい事実だが、営業課の人間ではないので、別に気にしないことにしていた。

だが、目の前にいたのは美男美女のカップル。いや、年齢的には美男子美少女でも通るかもしれない。そのようなカップルだった。というか、さっきのリア充だった。そして、美少女の方は、スズキの営業スマイルを見て、少し引き気味だった。

そして、その営業スマイルを浮かべながら言葉を返す。

「なんででしょうか？」

リア充二人組は、落ち着いた雰囲気を持っていた。

「少し、お時間よろしいでしょうか？」

とても丁寧な口調だった。毎回声を荒らげる上司とは大違いだ。心の中で昔の世界のことを、スズキは毒づいた。

「はい。大丈夫ですよ」

「では、とりあえず、おすすめの食堂があるんですよ。デザートも出してくれるみたいですし、行きましょう」

スズキは何故誘われているのが全く理解できなかったが、別にこれといって用事はない。取って食おうという訳でもあるまいし、とりあえず同行することにした。

「はい。わかりました」

美少女の方が何も言わないのが、少し気になるな。

「さて、僕はアルと言います。こちらはエレンです」

アルは椅子に腰をかけ、目の前の男に向かって言った。

「私はスズキと言います。元の世界ではなく、こっちでスズキです」

アルは、すこし驚いた。元の世界と同じような名前の人がいるとは、あまり思っていなかったからだ。だが、普通に考えれば、安易

な考えでそう名付けた人がいても、不思議ではない。そして、一人称が私ということに対しても驚いた。スズキにとっては、業務用の雰囲気になると、自然と一人称が私になる癖を持っているのだが。

「では、なんか適当にメニューでも見ていてください」

場所は、いつも泊まっている宿の食堂だ。レストラン的な感じで、いつでも解放しているらしい。

「はあ、ありがとうございます」

スズキは、その言葉に応え、元の世界とあまり変わらない様な感じで立ててあったメニューを手に取り、広げた。

宿泊客の朝昼夕のメニューは決まっているが、通常時は、普通に頼めるのも、この食堂のいいところで、もちろん宿泊客がメニューを食べ終わった後も、何か食べたいとなれば簡単に頼めるのも強みだった。そして、何よりこの料理はうまい。追加注文させたくないうまさがあった。

「じゃあ、本題を言いますね」

メニューを真剣に見ていたスズキに向かって、アルは言った。

「はい……」

少し身構えるような雰囲気を醸し出しながら、スズキは答えた。

「僕たちのパーティーは人員不足で、人手が足りません。何となく運命という言葉では言いすぎでしょうが、一目見たときからスズキ

さんが、僕たちのパーティーに入ると、いい方向へ行くと思いましたが。ネットとかで誘うのも気が引けますし、なかなか接点がない世界なので、直感とかをたよりにしたいんですよね。別に断ってもいいです。僕たちと、協力して、クリアを阻止しませんか？」

「え？」

スズキは疑問の声を発した。途中までは理解できたのだ。勧誘してくれたことは、思ったよりもうれしく、歓喜した。だが、アルは最後になんて言った？

クリアを阻止するとか、言わなかったか……？

## 八頭目、勧誘

「え？」

スズキの声は、アルの耳に入った。いきなりクリアを阻止すると  
言われたのだ。この反応をして当然だ。逆に、この反応をしないよ  
うな異常者だと困るほどだ。

アルは、スズキを観察する。疑問符が頭の上にてできそうな顔を  
していた。これは何か言わないのかな、と思った。

「俺たち……俺とエレンにとっては、現実世界よりこっちの方が楽  
しいんです。だからさ、元の世界に帰りたくないんですよ。説明書  
にも、セカウイキにも、クリアしたら“全員”戻ることになってま  
すからね……」

アルは一度ここで話を切った。スズキの反応を見る。それは迷っ  
ているようにも見えた。

「まあ、あなたにそれを強制するつもりはないです。ただ、二人じ  
ゃ、阻止は厳しいんですよ。まだギルドを作る時期ではないと思っ  
てますけど、時間が経ったら、ギルドも作り、攻略を目指す人間た  
ち……攻略組とでも言いますか。攻略組に、対抗して、クリアを阻  
止したいんです」

そうアルが言った後は、静寂が支配した。仕込みをしている厨房  
からは怒鳴り声が発されているが、三人の耳には入ってこなかった。

だがエレンが、口を開いた。

「まあ、私も、こっちの方が楽しいしさ。元の世界では虐められて、不登校だったから。こっちなら、まあ、虐められることはないし、冒険者としては、力が全てだからさ。虐められないほど強くなって……見返したいんだ」

スズキはそれを黙って聞いていた。先ほどまでの疑問めいた表情はなくなり、真剣になっていた。

そして、スズキは……口を開いた。

「私自身も、前世では辛い思いをしていましたからね……毎日8時間を超えるサービス残業……日付が変わるまでに家に帰れることがまれでした。ですが、こっちの世界では、多く寝れる。それだけでいい世界に思えてきます。ですが……こっちの世界で、金を稼ぐ自信がないんです。私自身、元の世界では、プログラムの腕だけは一級品と、自負していましたが、この顔と、性格で、なかなか良い思いができなかったんですよ……そして、プログラムの腕が全く関係なくなつた、こっちの世界で、うまくやっていく自信がないんです」

その言葉を聞いて、アルはすぐさま答えた。

「ホームページなら作れますし、それで金を稼げるような設定にすることが出来ます。だが、スズキさんには、常識人や、社会人の立場で、俺たちの行動に助言をしてほしいんです。何分、こっちには世間知らずの二人しかいない。成功には常識人のスズキさんが必要なんです。パツと見てわかる、社会人としての苦勞が、雰囲気から伝わってきています。スズキさんは、最高の社会人ですよ」

「そこまでほめられることはしていないんですけどねえ……付いていって、食い扶持を稼げるなら、喜んで付いていきますよ。食は、

大事ですからねえ。ここの飯も美味しかったですし……元の世界への未練は……せいぜいもつとプログラムしたかったくらいですからね」

「ありがとうございます。そして、ようこそ、アフマル・ハシヤラに」

「どうも」

スズキも、アルも、笑顔で握手をした。側にいたエレンも、ここにこと笑っていた。

「【硬さを、奪え！ ドウロ・サカル！】」

デバフが、ゴブリンに襲いかかる。緑色の皮膚に、革の鎧だけつげ、醜悪な顔をさらしている生物は、驚いたように、

「ぐぎやああー!!!?!」

叫んだ。

「ナイス支援！ GJ!」

知ってる限りのネットゲっばい賞賛を述べながら、アルは駆けた。

手に持つは一本の短剣。銘はなく、そこらの武器屋で売ってそんな無骨な一品だった。まあ、ギルド支給の武器など、その程度なだろう。

「【ファス・アバトレ】！！！」

アビリティが放たれた。

短剣は滑るようにゴブリンの腹部へと当たり、滑らかな様子で、肉を引き裂いた。

昨日のダメージの約1、5倍のダメージがゴブリンのHPを減らし、残HPが半分近くになった。

「ラストっ！！！！！」

最後にエレンが適度な距離まで移動した。右手に持つ大槍を、左手でも握り、安定感を増す。

そして、突く！ 突く！

安定した軌跡を描きながら、槍の先端は、革の鎧の隙間へと入り込む。また、先ほどからアルの近くに居たGCも、エレンと一緒に肩の肉を噛み千切り、ゴブリンのHPを減らした。

この三人＋一匹の連携により、成す術無く、ゴブリンはデータのようなドットとなって、昇天した。そこにはドロップアイテムであるゴブリンの肉が残された。

「おおおおおおおー！」

スズキは、初めてのゴブリン討伐に、感慨を露わにした。中学時代。親に無理言って買って貰ったファミコンのロープレの映像が、脳内に映し出される気がした。初めてやったロープレで、はじめの町から出て、フィールドに出てきたスライムを倒した感覚。それによって得た経験値とゴールド。とても興奮して、その日はずっとゲームをしていた気がする。やりすぎて取り上げられたこともあった。そのときにゲームをやって、おもしろいと思ったから、俺は今、ゲームの道に進んでいる。

様々な思いが、スズキの胸と頭を駆け巡った。

でも、その様々な思いは、全て、嬉しさとか、興奮とかにつながっている気がした。

それ程に、楽しいのだ。自分が斬ったりする訳じゃないけど、ゲームとして、優越感に浸れる感覚が。残業など、全て忘れそうだ。

「なんか、モンスターを倒すときって爽快感あるよな」

アルも同調した。アルはすでに昨日、その思いを体験していた。だからこそ、クリアを阻止しようと言ったのだ。その気持ちは、スズキにも理解できた。

「まあ、ゴキ様と一緒にだから、さらに感激が上昇中………やっぱりいいわ。ゴキ様いいわ。アル、頂戴？」

「召喚獣みてーな扱いだから、あげねーよ」

「……………」

エレンは、少し頭をひねっているようだった。何か、思いつきそうな感じがする。

「そうだ！」

エレンは叫んだ。

「どうした？」「どうしました？」

それに驚いて、アルとスズキがエレンの方を向く。

「私が召喚スキル得れば、毎日ゴキちゃんといチャイチャできるんじゃないね！ やべえ、私天才だ！」

静寂。

じめじめと、湿気がこもり、入ってくる光が少ないので、薄暗いダンジョンの中、この空間だけが、湿り気がなくなったように思えた。

そのかわりに出来たのが、絶対零度の氷結空間。  
少しの時間が経った。

そこに言葉はなく、何となく二人の陰鬱とした雰囲気と、一人の悦に入った笑顔が、何ともいえない不協和音を奏でる空間だった。

アルが口を開く。

「召喚スキルとか、魔法系は、適正で使える魔法が変わるらしい。単純な攻撃魔法系でも、炎、氷、雷、土等々、色々な属性があり、

それは人次第で変わるらしいぜ……だから、多分、おまえがゴキブリ流召喚術を身につけるのは、不可能だと思う……」

正直、ゴキブリに対する執着を思いつきり語る少女に、多少引いていたのは事実だったが、まあ、答えないわけにもあるまい。

「まじで！？ それは初知りだわ。残念だぁ……」

圧倒的な残念感で、膝から湿り気が少しあるダンジョンにへたり込んだエレン。

「ちなみにみなさん、今ゴ布林十匹を倒すクエスト中だって言うこと、覚えていますか？」

常識人のスズキが、引いている少年と、へたり込んでいる少女という状況に観念したように、言った。

そういえばスズキにこっちの世界の楽しさ教えるために、とりあえずゴ布林十匹受けていたなーと、アルは思い出した。

「じゃあ、後九匹、がんばりますか」

アルが言った。

「いや、ゆっくりやった方が、ゴキ様と戯れる時間が……」

「ゴキ様はいいですから、とりあえずさっさと終わらせましょう」

また妄想を語り出しそうとするエレンを、途中でスズキが止めた。

ちなみにこの後三人は、スズキのバフやデバフの効果が意外と大きかったのか、昨日よりも二時間程度早くゴブリンを狩り終わり、午後ももう一度同じくエストをクリアしていたのであった。このとき、食事をすればある程度HPやMPを回復できることもわかったのであった。

## 九頭目、大蛇

アフマル・ハシャラにスズキが加わって、五日経った。

「おっ！」

朝。窓のカーテンの隙間から光が射し込んでいる。その中で、アルはデバイスをみていた。

そして、何かを発見したように声をあげた。

「なにい？」

眠そうな様子で、エレンが聞いた。髪の毛もボサボサで、整っていない。まあ、水で濡らし、どんな髪型がいいか考えれば常識的な範囲内なら一瞬でそれになる、変なところで便利な機能があるので、直すのに時間はそこまでかからない。

因みに、その近くで、あくびをしながらスズキは居る。少し眠そうだが、エレンよりはしっかりと目を覚ましていた。そして、のんびりと、自分のホームページをデバイスに作るうと、少しずつ奮闘していた。毎朝と夜の楽しみとなっている。それに集中しているのか、アルの言葉への反応はなかった。

「ついに【木】が有る場所が見つかった。これで外国に行く算段がたてられる」

「本当ですか!？」

その言葉に目敏く反応したのがスズキだった。【木】等を使った、

生産系スキル、【木材加工】<sup>ウッドワーキング</sup>を、彼は持っていた。彼のスキル構成は、ジョブスキルが【変化魔術師】で、ジョブスキルで発現するサブスキルが、【上昇魔法】【下降魔法】【下降魔法】だ。そして、その他のサブスキルは、【攻撃魔法】と、【木材加工】を持っている。要するに、彼は敵の防御や攻撃を下げたり、見方の攻撃を上げたり、攻撃魔法を撃つたり、木材を加工したりできる。後衛のエキスパートみたいな存在である。回復はできないが。

そして、木材加工ができる彼が、スキルで加工できる木材が見つかったとなればうれしくなるのも当然であろう。エレンは【鍛冶】スキルを持っているが、炉がないので、武器が作れず、せいぜい他の人より金属類を研ぐのが巧い程度の恩恵しかない。

「ああ、本当だ。このナガハマから、北の方角に行った所が、福井県の敦賀<sup>つるが</sup>なんだが、そこに【蜻蛉<sup>とんぼ</sup>の森】という所が有るらしい。そこで、【木材加工】スキルで加工できる、【木】系のアイテムがとれるらしい」

「本当ですか！ 腕が鳴るなあ」

本当に嬉しそうな笑顔になりながら、自分の右腕を、スズキは見た。

「だから、今日から向かうぞ。結構かかるからな」

「はい！」

「え？」

スズキはとてもいい笑顔で頷いたが、顔を洗いにいって、戻って

きたらいきなりそんなことを言われたエレンは何のことやらさっぱりわからないのだった。

勿論もう一度アルが説明した。新しい街に行くということではじめはエレンも首を縦に振らなかったが、最終的には折れた。

街道。石で整備されたそれは、旅人たちの歩く道しるべとなり、旅を楽しむ。

アル、エレン、スズキは、そこを歩いていた。

目指すはツルガの、蜻蛉の森。木材目指して、歩く。

「暇だな」

思わずアルがつぶやく。それほどまでにやることがない。十分くらずつ定期的に【探索】をやり、敵がくるか確かめたり、目的地につくのかを確かめているが、敵はこないし、目的地には着かない。

彼らはすでに二時間程度歩いている気がする。定期敵に飲むMP回復ポーションの味はすでに飽きている。緑色の液体を見るのも嫌になってきた。そもそも緑色という色が駄目なのだ。飲む気にならない。

「まず必要なのはゲームですかねー。それがあれば暇は何とかかなり  
そうですねー。今度作ってみますねー」

旅の問題点を、何とかプログラムの物へともっていくスズキ。  
その目は楽しそうだ。

「やっぱさ、あれだよ！ ゴキ様に乗っていきこうよ！ そうすれば  
早く着くよー！」

「却下したいですね……」「却下だ」

案をエレンが出すも、一瞬で二人に却下される。それを聞いてエ  
レンは、ふてくされたように、頬を膨らませた。もちろん、二人は  
ゴキブリに乗りながらという奇妙な旅が嫌だったのである。アルも  
スキルレベルが上がり、はじめより大きいGCを召喚できるよう  
になったが、それに乗る気にもならない。

「っ……っ？」

そして、何かをアルが感じ取る。

「敵だ……北西。こっちに向かってきてる。個体はわからん」

「準備する？」

「一応。臨戦体型になっとけ」

エレンがデバイスから、大槍を具現化する。右手に収まったそれ  
は身の丈をゆうに越えていた。アルも具現化した短剣を右手に持つ。

「《魔、界、在、黒、光、速、蝕、飛、出、現》」

そして、MPを練り、GCを召喚する。それは、まだ、はじめに覚えていたアビリティだった。わざわざ強いGCを召喚することもないか、と思ったのである。

少しずつでてくる筈のGCも、パターン化を嫌ったのか、一瞬で出てきた。ただ、黒く光る背中も、くねくね動く触覚も、カサカサ動く足も、当社比五倍の巨体も、健在だ。それを見てアルとスズキは露骨に嫌そうな顔をするが、エレンはともうれしそうに笑った。

「バフはどうします!?!」

スズキが叫ぶ。

「とりあえずはいい! 後は状況判断……こっちきてるぞ! ものすごいスピードだ!」

アルの探索が、敵モンスターの襲来を告げる。

そして、それは……

「アナコンダだ!」

蛇だった。大蛇。体長二メートルを超えるその体。力は強く、絡まれたら……抜け出せない。

「やばい! 離れて戦え! 俺はGCを向かわせる」

アナコンダに向かい、ジャイアントコックローチ、GCが、飛んでいく。大蛇と、オオゴキブリ。大きい種での対決。

大蛇が毒を放とうと、舌を伸ばし、GCへと当てようとする。

だが、GCはゴキブリ特有の俊敏性を持って、避けた。当たっても、一瞬で抗毒がつき、次からでるGCに、アナコンダの毒耐性ができるので、あまり問題はないが。

そして、GCが、アナコンダの腹に噛みついた。一瞬、アナコンダが怯む。

「今だ！」

アルは叫んだ。

「炎の神よ、我が魔力と、力を合わせ、現世に炎をもたらせ、フロガ」  
「！！！！！」

炎が、燃える。

スズキの詠唱した呪文が、アナコンダと、そこへとつつこんでいったGCを焼き付くす。

だが、アナコンダのHPはまだ減りきっていない。GCも、残り少しのHPで懸命にアナコンダを攪乱させていた。

「とどめだ、【アーラ・シーカ】！！！！」

最後に、アルのアビリティが放たれた。彼の右手から放たれた短剣は、不思議なほど流麗に、アナコンダの腹へと吸い込まれ、HPを削りきった。

そして、そこには【蛇の皮】が、落ちた。

エレンはそれを拾いながら、

「焼けちゃったゴキ様……可哀想」

と、いったのだった。

もちろん他の二人があきれたのは、言うまでもない。

緑は繁茂していた。深緑とも呼べるその深い緑は、吸い込まれそうな不思議さと、踏破することの難しさを感じられた。

蜻蛉の森。

三人は、そこへとたどり着いた。

風が吹く。木々が揺れ、さざめきのように木の葉の擦れ合う音が聞こえた。

その風がやむと、少し羽音のようなのも、聞こえてきた。

「どうしますか？ 個人的には今日はツルガに行って、休んでから、明日来た方がいいと思いますけど」

スズキはアルに聞いた。もう陽も落ちかけている。夕暮れの赤い光がSEの世界を照らしている。

時間がない。体力がない。

ここにくるまでに何度も【探索】をしたので、アルはMPがつき、MP回復ポーションも底をついている。

そして、エレンやスズキだって、数値上のHPやMPは残っているかもしれないが、精神力や、蓄積される疲労などは、確かに残っているのだ。

「そうだな。ここから近いらしいし、今日はそっち泊まって、明日来るか」

「まあ、ゴキ様を召喚できないんじゃない、戦意も半減しますからね！  
やっぱ、ゴキ様がないと！」

アルもスズキの提案に同調し、エレンも、言い方はアレだが、それに賛成した。

彼らの異世界八日目は、これで終わったのである。

## 十頭目、衝撃

「まじかよ……」

思わずアルは絶句した。目の前の惨状に、言葉が続かない。

体に乗っけたら朽ち果てそうなベッド、黄色い染みが着き、所々では、風化で朽ち果てそうな壁。テーブルなどという上品なものもなく、みかん箱。が机の形をして、八つ積まれており。その周りにも四つの椅子と思われるみかん箱があった。

計十二のみかん箱と、朽ちそうな木。ふかふかのベッドもなく、シーツは乱雑に置かれている。風呂などあたりを見渡しても見つからない。

これが宿だと、アルは信じられなかった。

ふと、気配を廊下から感じた。廊下は小綺麗に整っており、部屋の中との温度差を感じた。敷いてあるカーペットは汚れの欠片も見あたらず、窓には何輪もの花が、活けてある。夜景も昼景も、すべてを美麗にして取り込むような美しさの窓があり、廊下と部屋の中を繋ぐドアもピンク色に塗っており、中がみかん箱の惨状だと、入る前は誰も気づけない。

しかしピンクのドアの裏側は、今にも崩れ落ちそうなほどボロくなつた木だ。

これは何の冗談かと疑いたくなる。

そして、その廊下をエレント、スズキが歩いてきていた。

エレンはいつも泊まっていた高級宿よりも綺麗になっている廊下をみて、期待しているようで、スキップに鼻歌と、惨状を見たことでの不機嫌が未来に吹っ飛びそうな上機嫌だった。

「来るな！ こっちにきてはいけない！」

思わずアルは叫んだ。叫ばずにはいられない。

あの純粹無垢で、純真無垢で、汚れを知らない一人の美少女に、この部屋の中の惨状を見せたらどうなるだろうか。

スズキはまだいい。たぶん弁えがある。心の中では良くは思わないだろうが、それでも表に出すことはないだろう。

だが、だが、だが、エレンは、きつと叫び、泣きわめき、罵詈雑言を放ち、惨状の部屋がさらに惨く、酷く、もはや目で直視できない状況になるだろう。

だが、そんな聡明なアルの思案も、エレンには届かなかった。

「え？ なになにー？」

こちらに駆け寄ってくるエレン。もう声を出す気力も尽き、駆け寄るエレンを、気の抜けた呆然の顔で見つめるだけ。

そして、被害者が増えた。

エレンが膝から崩れ落ちた。その口からは茫然自失に、

「嘘よ……」

と、言葉がこぼれ落ちた。

「これはひどいですね……」

落ち着きを持ちながらも、ひどさに顔をしかめるスズキ。

今宵の夜は、SEにきてから最悪の夜になりそうだ。

陰鬱とした表情が、三人を支配した。寝返りをする度に軋み、音が響くベッド。枕は固く、木で作られたのかと錯覚するほどだった。しかもシーツは汚く、悪臭もする。これが人間の寝る場所かと心の中だけで毒づきながら、三人はあまり眠れない夜を過ごした。

不快感が襲いつつも、外にでるとその清涼感に、軽く感激する三人だった。

「で？　いくんでしょ。蜻蛉の森」

エレンがアルに聞く。目的は【木】。【木材加工】スキルで使う、材料だ。

「ああ。それで、籠……俺たちが気球で乗る部分だな。を作る」

「おう。腕が鳴るぜって、まだ【木材加工】スキル。使ったことないんですけどね」

「まあ、たぶん大丈夫でしょ」

少し弱き気味なスズキの言葉に、エレンがフォローを入れる。もつとも、多分という言葉で彩られたそれは、あまり現実味を帯びていないものであったが。少しくらい断言してくれてもと、スズキは思う。

「まあ、とりあえず【木】を手に入れないと、やりようがないからな。遅くたって無くなったじゃ困るし、急ぐか」

「わかったよー！」「了解でーす」

と、二人が賛成し、三人は蜻蛉の森へと向かった。

鬱蒼と茂る森は、不気味な暗さを真つ昼間から放っていた。【探索】スキルがなければ、奇襲も簡単にできるだろう。尤も、それは視覚限定の話で、聴覚で簡単に気づかれるだろうが。少しでも動けば、ガサガサと、葉と、体と、さらに葉に、ちよっぴりの枝が合わさって、進入するのは難しいが、守るのはたやすいという場所を、その森は築き上げていた。

尤も、伏兵などの待ち伏せがやりやすいこの森も、アルたち三人は、歩き回る必要がある。待ってても【木】は手に入らないのだ。

「見つからないねー」

エレンが不満そうに言う。先ほどから三十分近く歩いているが、

【木】も、何かモンスターも見あたらない。

「ああ、音は良く聞こえるんだがな」

アルもそれに同調した。先ほどから少し遠くでカサカサと、葉っぱが擦れあう音が聞こえていたが、特に害はないので、無視をすることにしていた。

「まあ、警戒はしといてくださいねっ」と

太い根に足を躓けそうになりながら、スズキが言う。警戒しないにこしたことはないのだ。いつモンスターが襲ってくるかわからない。

エレンがふと何かを感じた。

足元を見ると、そこは光っている。不自然な光り方。例を挙げると、元の世界でやっていたゲームのドロップアイテムの光り方だろうか。この世界のゴブリンを倒したときに得るアイテムの光り方にも酷似していた。

そして、それを手でつかんでみる。

「見つけたよっ！」

それは紛れも無く、【木】だった。どっからどう見ても【木】だ。

「おっ！ ナイス」

アルがエレンを褒める。

「おお！ これで野望に一步近づきましたね！」

もちろんスズキには、外国に行くという方針を伝えてある。それをスズキは勝手に野望と称しているが、まあ、実害があるわけではないので、アルは何も言っていない。

「やったー！！」

バシッ！

エレンの喜ぶ声と、何かの打撃音が重なった。そして、エレンが崩れ落ちそうになる。

だが、起き上がった。方法は……体術！

【体術】スキルを使い、不意打ち気味の攻撃に対して、地面に叩きつけられそうになりながらも、なんとか受身を取り、ダメージを軽減した。

それでもHPの一割程度は減っている。

「どうしたっ！？」

緊迫感がある声色で、アルが叫ぶ。

「わからないけどっ……後ろから衝撃が！」

エレンの後方の草木は、何かで薙ぎ払われた様に、葉や枝が散乱していた。それは吹き飛んだように広範囲にあり、まるで狭い範囲だけ台風が通過したようであった。

「風の衝撃波……？」

アルが見たとおりの感想を言う。そして、

カサカサッ

波が擦れる音、そして一瞬で……

「ぐはっつっ！」

また、エレンの背中へと当たった。エレンは防ぐため少し移動しているが、場所は先ほどから約三十度傾いた場所に放たれていた。

アルたちを中心に、二発。

「逃げるぞ！ 敵の場所もわからんのに、戦ってられない！」

そして、アルは駆ける。だが、エレンの方がジョブスキル補正等諸々の影響で、駆けるのが遅い。

カサカサッ

三発目。

「ぐはっ！」

エレンに掠る。先ほどより、照準が甘い気がした。だが、確実にエレンのHPを削っており、エレンの残りHPが残り半分近くになっていた。

アルはデバイスを操作して、HP回復ポーションを取り出し、エレンに投げた。

「飲んどけ」

駆けても、撃たれる。  
留まっても、撃たれる。  
何か方策はないのか？  
考える。考えるんだ。

カサカサッ

「伏せろっ！」

音がただけで、条件反射で反応できるようになった。なんとか三人が伏せ、謎の衝撃波が当たることはなかった。

「仕方ない……スズキ、頼めるか？」

思い詰めたような顔で、アルは言った。

「何です？」

自分が衝撃波を避けることで手一杯なのか、少し早口気味で、スズキが答えた。

「森を……燃やしてくれ。敵を炙り出す。そして、こっちはGCを使って、壁を作り……防ぐ」

森を焼く。

それがアルの導いた、戦術だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1307z/>

---

赤い蟲たちは戻らない

2011年12月14日22時45分発行